

## 江戸のまち（小学6年生）

### ― 都市を通して学ぶ歴史学習 ―

中 窪 寿 弥

#### 一 はじめに

##### （一）都市を通して学ぶ歴史学習

私は、歴史の進歩を子どもたちにわからせるために具体的な民衆の生産と生活の視点から授業づくりをめざしてきた。言いかえると、人々の生産を中心とするくらしが時代とともにどのように変わっていったのか、その中に時代の進歩をみようという主張である。また小学生では、例えば幕府の仕組みはどうであり、どのように領主を通じて農民を支配したのかといった「人と人との関係」や幕府といった構造にせまるよりは、米をどのように生産し増産に工夫したのかというような人とモノとの関係に重点を置くほうが、その時代の生産と生活の進歩により結びついた授業が構成できると考えた。

しかし、近世以降の実践を見通した時、民衆の生産と生活という視点だけでは時代がとらえきれないことに気づいた。資本主義が本格的に始動する明治期以前には商品作物の生産が伸びた。その中で、農民層の分化を生みながら工場制手工業を中心とする都市での生産が伸び、大都市への人口集中もうんでいった。こうして、生産力の向上は、人々のくらしに消費生

活という新たな側面を提示した。さらに、生活が豊かになるにつれて余暇を楽しむというくらしも広がった。このような歴史の流れをとらえると、近世以降は消費や文化といった視点も落とせないのではと考えてきた。そして、そのフィールドは村よりは都市という場がよりふさわしいのではと考えたのである。

## (二) 江戸のまち

織豊・徳川政権の国内統一のもと兵農分離が進められ、武士層は城下町に集められた。その武士層の生活を支えるために商工人口が増大し、それにもなつて都市周辺を中心としながらも交通網の発達によって、各地に特産物の生産を興隆させた。農民の中にも生産を高めるために、農業書の普及とともに農具の開発や肥料の多用化に注目し多肥集約農業が進むことになる。しかし、これは一方で農民層の分化をうみ、農具や肥料を買ったり商品作物の売買というような貨幣経済の波が農村にも押し寄せることになった。それに伴い農村で没落した小百姓たちの一部が江戸などの大都市へ仕事を求めて流れ込み、都市下層を形成し都市への人口集中に拍車をかけることになった。

このようにして江戸は享保年間には百万人を越える世界一の大都市となった。井原西鶴が『世間胸算用』に取り上げた「船町の魚市」も「神田須田町の青物市場」も、もともと江戸城御用の市場として設けられたが、問屋が買いつけた魚介類や青物をさらに仲買が買い、仲買はそれを小売商人に売り渡した。小売商人は見世(店)を持っているものも多かったが、多くは「降り売り」「棒手振り」などと呼ばれる零細な行商人であった。このような流通ルートに支えながら、江戸は大消費地でもあった。

よく江戸の文化は庶民の文化と呼ばれるが、庶民が文化を享受できた背景には、寺子屋を中心とする庶民教育の普及によ

り識字率が向上し同時に大衆の文化レベルが向上したことがあげられる。上方で起こった出版は、江戸時代中期以降は江戸独自の出版物（江戸地本）として栄えた。その問屋の一人に葛屋重三郎がいる。彼は黄表紙約二百点、狂歌本六十点、断本・洒落本など合わせて約四百数十点にのぼる本を出版した。また写楽をはじめとする絵師たちの浮世絵を三百数十点ほども刊行している。さらに地本問屋以外に貸本屋も出版物の普及を支え、挿絵がふんだんに入った草双紙や読本がベストセラーとなって、庶民の娯楽となっていたのである。このことは、江戸時代になって出版業が一つの生業として成立したことであり、そういった娯楽を楽しむ庶民のくらしがあったということでもある。こういった文化の成熟は、士農工商といった身分秩序でははかれない新しい可能性も生むことになった。狂歌と随筆にすぐれた蜀山人は幕臣の大田直次郎という武士であることはよく知られているが、彼を中心とする狂歌グループのメンバーを調べてみると、武士・豪商・旅籠や遊女屋の亭主・医師・吉原の遊女といった多彩さである。

子どもの理解を豊かなものにするために、本実践では『江戸図屏風』や浮世絵といった絵画教材を随所に使うことにした。国立歴史民族博物館蔵『江戸図屏風』の右隻には一八五二人、左隻三一三一人、合計四九八三人もの人物が描かれ、特に日本橋付近では大店が軒をつらね、船などで物資が集まる様子や様々な身分の人が行き交う様子、天秤を担いで行商にまわる小売商、魚河岸に集まる魚と人々、山ほどに積まれた材木や俵などという生き生きとした人々のくらしがいかみられる。

江戸のまちが人口百万を越えたのは、享保年間と言われている。また、多色刷り版画によるカレンダーの競争から始まった大量生産による浮世絵が流行し始めたのは鈴木春信の多色刷りが大きな契機となった明和二年（一七六五）以降のことである。言うことは、本題材で扱う「江戸のまち」「人口百万人の大都市江戸」「浮世絵を楽しむ町民」では、厳密にみれば時代差がある。しかし、小学生には、その時代差の意識より江戸というまちの仕組みやそこに住む人々のくらしをトータル

でつかみ、「江戸のまち」という1シリーズとして教えた方がより鮮明にわかるのではと考えこの題材を開発した。

### (三) 現代の子どもたち

浮世絵の題材になったものは歌舞伎の俳優であったり人気力士であったりと今でいう当時のアイドルであったし、部屋の壁などにはるといふ点でも今のポスターと同じ使われ方をしている。しかも浮世絵は分業により大量生産も可能になり、単価が安くかけそば一杯と同じくらいの値段で手に入る。普段はちょっとお目にかかれない噂のアイドルでも、少しのお金があれば身近なところへ飾れる、そんな共通点が感じられるし、そんなくらしが江戸に住む人々の間に存在したということは、子どもにとって以外な親近感を生むと思った。消費や文化という軸を授業の中に位置づけるから、生産や村といったことを教えずともいいとは思っていない。前近代社会においても民衆の最も一般的な生活の場は農村であるし、生産力の向上が歴史を動かした一つであることに異論はない。近世までの生産を中心とした生活と重なりながらも、新たな時代をとらえる視点をつくりながら鮮やかに歴史の進歩をとらえられるのではと考えた。

## 二 指導計画(全3時間)

○第一次 将軍がつくった大都市 江戸(1時間)

○第二次 町人たちのくらしをのぞいてみよう(2時間)

・大消費地 江戸  
・浮世絵を楽しむ町人

### 三 取り組みの経過

(一) 第一次 将軍がつくった大都市 江戸 (その一)

ねらい

○将軍を頂点とした武士のために大都市江戸がつくられたことをわからせる。  
教材について

家康が江戸に入城したのは天正十八年で、当時の江戸は茅葺きの町家が百軒ばかりあるだけの寂しい汐入り芦原であった。太田道灌が一四五七年に築城した江戸城は、その頃石垣は一ヶ所もなく、屋根は板葺き・茅葺きで雨漏りもするという粗末なものであった。慶長八年家康は諸大名に石高千石につき一人という人夫を動員する御手伝い普請を命じた。まず今のJ Rお茶の水駅付近にあった神田山を切り崩してその土で日比谷入り江を埋め立てる大工事が行われ、日本橋以南から京橋・銀座などの広大な町地ができた。天守閣の築城には莫大な石材と材木が必要であり、これらの資材を直接建設地まで運ぶため、あるいは防備や商船の行き来のために水堀が必要になる。そのために河川を整理して流れを変えたり、船が通れる水路を築いたりして、江戸湾から直接に資材を船で運べるようにした。内堀内には御三家などの重臣の屋敷を配し、多数の家臣の居宅には麹町台地をあて、家光の頃には参勤交代の制度が確立し武家屋敷も立ち並ぶこととなった。こうして家康の頃に手がつけられた町づくりも家光の頃の寛永年間にほぼできあがった。それは、城西から城北地区にかけての山の手には武士が移住する武家地を、水運の便をはかった下町の埋め立て造成地からなる城東地区に商人・職人が住む町地を配し、その周りに

寺社を配置したというものであった。このようにして当時の京都にはぼ匹敵する人口四十万人ほどの大都市江戸が計画的に造られた。

大都市江戸の空間は大きく武家地、寺社地、町地の三つに分かれるが、面積比では、武家地：七十%、町人地：十四%、寺社地：十六%で、人数でいうと武士約四十五万人に対して町人約五十五万人であった。武士の生活に必要なものをすべて確保できるようにという思惑に基づいている。

### 授業展開

① 江戸のまちから連想することを発表する。

C 「大阪城みたいな大きな城」「城のまわりに町がある」「商売屋さんが多い」「火事」「お城のまわりに松が植えてある」「日本橋というところがあってたいこ橋みたいな橋がかかってあって、侍やら商売人がいっぱいいてる」等。

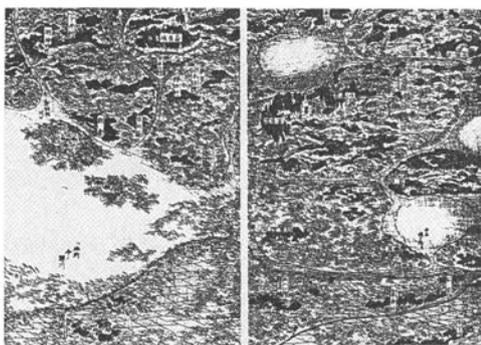
② 家康が来たころの江戸の様子を見てみよう。(資料①)

「田舎で、田んぼだらけ」という声が聞こえる。草がたくさんはえていて、川や湖をまず見つける。次に農家みたいな家が少しあることに気づく。教師の方から、江戸湾や集落の位置を確認していく。

③ 新しくつくられた江戸の町の都市計画を想像する。

T 「こんな所に家康は江戸のまちをつくったんだけど、そこにはだれが住んだのかな」

資料①『御江戸図説集覧』にみる永禄年間の江戸



C 「商人」「武士」「職人」「金持ち」(お金持ちな商人とのこと)「お坊さん」「將軍」「旅人」

(商人と職人を合わせて町人と呼んだことを教え、それぞれが住んだ家を考えて。町人はお店と長屋、將軍はお城、お坊さんはお寺、武士は屋敷とまとまった。)

T 「君たちが將軍ならこんな建物や道路なんかをどのように並べて江戸のまちをつくりますか。各班で相談してみよう。」

1班：湖や海を埋め立て、町人や武士の住む所にし、江戸のまちの真ん中に城を建てまちを監視する。城の周りにまちをつくり、近い所に武士を住ませ遠くなるにつれて身分が低くなる。

2班：(その1) 真ん中に城をつくり北に偉い武士、下は普通の武士、はしに町人や農民が、残った所が寺。

(その2) 真ん中に城、周りに橋をかけ武士を住ませ、その周りに町人。南は何もないので、見張り用のとりでをつくる。

3班：お城は山に造りその周りに武士をおいて、川の近くに町民をおいて商業をする。道を広げる。

5班：城の周りに堀なんかを造り、高いところ(天守閣)を造った。

④実際に江戸のまちを見てみよう。

江戸図屏風のカラーコピーを広げ江戸城を探した後、目立つ大きな屋敷として、西の丸、松平伊予守、駿河大納言(家光の弟)、御三家の屋敷を捜していった。次に武家地、町民地などの構成がわかる図を取り出し、それぞれの割合をおさえ、江戸のまちが計画的に造られたことを確認した。

(二) 第一次 將軍がつくった大都市 江戸(その2)

①前時のまとめをする。(主に武士の住んでいた所の確認)

自分たちの想像と実際のまちの様子の違いを確かめていく。お城が真ん中であってその周りに堀があったこと、橋をたくさんかけていたことなどはあっていただけと子ども自身もすぐ気づく。埋立てについては、教師の方から説明した。また、お城のまわりに武士の屋敷があったことや、特に身分の高いものは近かったことなども確認できた。

本時では、さらに外様大名の屋敷が外堀の外に位置していたことに注目していった。城西側の堀の外にあった家はだれの屋敷か子どもにも尋ねてみると、「大名」「武士」「武士でも大名」「農民はこんなところに住まないやろ」と声が出る。そこでOHPを使って拡大してみると、「大名の屋敷と違う?」「武士や」さらに二倍に拡大すると、屏風に書かれてある字に気づいた子どもが出てきた。「まつだいらむつのかみと、何やる?」「ちよう、ちよう、……」「ながの?」。ここで、「長門」「陸奥」というのがくのにの名前であることを説明した。その大名の名前は毛利氏と伊達氏であるのだが、歴史好きな子どもがいてすぐ名前を出してきた。共に外様大名と呼ばれていることとその意味を説明した。

②町人たちが住んでいた所を調べる。

江戸図屏風から捜させた。子どもが見つけた手掛かりは「のれんがある」「奈良の土産物屋さんみたいに店の前にぶら下がってあって石でとめてあるやつがある」「店のマークが書いたる」というものだった。細かいところまでよく見ている。田中君は、赤いのぼりやのれんが目立つ京橋から新橋にかけてのまち筋を指した。久保君が南の方だとつぶやいた。町人たちのまちだとしたわけは、他に「商人とかはものを売ってやって、ものを買いにたくさんの人が来て、その通りはにぎわっているから」(久保君)、「建物が商店街みたいにつながっている(大村さん)」などである。

次に寺社が集まっている所をさがすと、「お城の北の方が多い」「江戸のまちの北西」という意見が多数を占めた。また、「ひっこしさせられたかもしれない」という声もあったが、江戸のまちの周辺には農民の家も見えてもまちの中にはないことを確認し、武士のために商人や職人、お寺などか集められてできたまちを城下町というたと説明した。

③江戸のまちを、武家地（赤、江戸城には赤丸）、町民地（青）、寺社地に塗り分ける。（資料②）

塗りながら、「町人の住んだ所は、埋立て地？」「これは道路？」「黒い所は、水？」などの質問が出た。教師から、堀が切れているように見えるけれど、それは橋などがかかっているだけで堀はつながっていると付け加えた。塗り終わったらわかったことを五つノートに書いてみた。

中山君 「道沿いに町人地が多い。」

杉本君 「僕は道に沿っているというのは、もう一つは海とか堀と

か水に面している。」

大成さん 「武士の屋敷は城から離れていくほど小さくなる（面積が狭くなる）。」

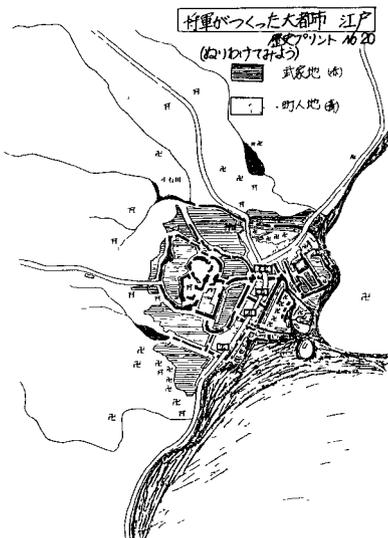
杉本君 「大成さんと似ているけど、將軍の住んでいる城の周りに、將軍を取り囲むように武士たちが住んでいる。」

久保君 「町人地の中の橋が四つかかっている道（日本橋、中橋、

京橋、新橋）は、他の道より太い。」

その他子どものノートをみると、

資料②



足立君 「寺はほとんどまちの外にある。武士は武士、町人は町人がかたまっている。」  
などがあった。

最後に、江戸は將軍がこのような計画をもってつくられた世界の中でも指折りの大都市であることをまとめた。

### 授業の子どもの感想（2時間分）

徳川家康は、元はあれ地だった江戸を何とかりっぱな町にして、そこで政治をしたいと思って、必死で江戸の町をつくったんだと思う。

まず、自分が安心して政治をできるように、城の周囲にほりをほって、本当に信用できる武士を周りに住ませたんだと思う。また、商業を發達させるために、大通りをつくり、その周りに商店街をつくったと思う。だけど家康は、それだけではなく、海から敵が来た時には、町人たちの反こうで敵をとりおさえようと考えていたのかもしれない。

寺や神社は一つの部分にかためて、僧兵をおさえやすくしたんだと思う。また、うめたてをしたり港をつくることによって、他の場所の年貢を運びやすくしたんだと思う。

家康は、それぞれの所に、武士、町人、寺などを集めることによって江戸を支配しやすくしたんだと思う。

杉本君

ねらい

○ 武士のくらしを支えるために多数の商人や職人が集められ、江戸のまちは、大消費地であったことを分からせる。

### 授業展開

① 江戸のまちの七十%を占める武家地に四十五万人もの武士がくらししていた。では、十四%の敷地にくらししていた町人は四十五万人より多いか、少ないか。また、それはなぜか。

教師の予想に反して、まず多いという声がある。理由として、「武士は広い屋敷にすんでいるから、一軒あたりは広くても人数は少ない」があがった。杉本君がすかさず、人口密度が低いねんとつぶやく。それだけ町人は狭い所にぎゅっとすしづめになっていることになる。教師から、町民はおよそ五十五万人であることを告げた。本時では、そのぎゅっとくらししていた町民たちのくらしをのぞいてみようと呼びかけた。

歴史プリント二十に神田という地名を確認した後、そこに残る町名のいくつかを黒板にはり出した。すぐに、「町人がいた」「その商いをやっている人がいた」という声が聞こえる。「大工町には大工さんがいっぱいいたとか」「鍋町には鍋職人がいたとか」「乗物町って何やね?」というつぶやきが続く。教師から、四十五万人もの武士のくらしを支えるために必要な仕事をする町人たちが集められたことを説明した。それぞれ何を作ったのかわかりやすいものから確認していった。大工町：大工さんが集まった町と子どもたちはすぐ気づく。

鍋町：これも鍋屋さんですぐ答えが出た。松下君が「鉄のうつわ」と付け足す。鋳物を扱う店と教師から補足する。

鍛冶町：「鍛冶屋」「刀」「包丁」「刃物」「武器」などとたくさん出る。

乗物町：手こずったが、中野君がかご屋さんと思いついた。

塗師町：「色を塗ったりする」と意見が出たので、教師からその頃塗るものは何かと尋ねると、「うるし」という答え。  
佐柄木町：これは先生もわからなかったというのと、もっと考えさせてという声。中野君「植木屋さん」、久保君「家を建て  
る」という発表。教師からこれはとき屋であることを伝える。「そんな専門家いたんか」という驚きの声。

白銀町：「よろい」「金物」という声。教師から銀細工と説明。「銀箔？」という声。

白壁町：「壁塗り屋さん」「今で言えば塗装屋」などの子どもたちの発表。

集められただけでなく、人口が増え生活が豊かになっていくともっと町人たちも集まってきたことを説明する。

②江戸図屏風の日本橋付近を見て、七人の町人と売られているものをさがしてみよう。

子どもたちは隣の仲間とも相談しながら、わいわいがやがやとさがし出した。全体的に売られているものは魚が多いことからこの当たりには魚市場があったとまとめる。

③中橋や京橋付近も注目してみよう。

中橋：「灯籠」「地藏石」「墓石」「五輪塔」などが出る。

京橋：「竹」「米俵」などと意見が出たが、俵についてはどうやらこもをかぶせた大根であることを説明。

④神田の町筋の武士と町人の会話を想像してみよう。

神田の町筋の絵（資料③）をOHPに拡大して、左から順に竹屋、檜物屋、酒屋（みそありの看板）であることを確認。

中央の二人の武士と酒屋の店員の会話を想像してみることにした。

〈大村さん〉

武士「おーい 酒屋。」

町人「はいはい。」

武士「酒をくれ。この店でとびきりうまい酒をな。」

町人「はい。かしこまりました。ところでだれがお飲みになるんですか。」

武士「わしの御主人じゃ。」

町人「そうですか。あなたも大変ですね。」「酒の御用意ができました。」

武士「代金は、後で払う。手間かけてすまなんだったのう。」

町人「いえいえ。」

子どもの感想

私は、神田付近に残る地名がそのままに町人がつくったりしている物の名まえそのものだったのでびっくりしました。それに、特産物でつくっていて、その名まえがあるのでなくて、各地から集められた人たちがそれぞれ名まえがついているくらいなので、かなりの人が集まっていたんだと思いました。それに、それがそめ物や大工やかご屋やお鍋を作っている所など、たくさん物があつたので、それだけものの数を將軍は必要で、集めたんだらうなあと思いました。だから、もともとからいた武士のほかにも、もっとたくさんの方が集まったんだらうなあと思いました。

澤辺さん

資料③



その他、手向さんは「江戸時代にもうこんなにくさんのものが物が売られていたんだなあと思いました。魚などがすぐ運べるように、海から市場が近かったような気がします」とまとめ、中島さんは「にんじんや米やはくさいやねぎは、農民がつくった物を町人が仕入れてきて、売っていたと思う」と言っている。

(四) 第二次 町人たちのくらしをのぞいてみよう ー町人のまち 江戸ー  
ねらい

○浮世絵（錦絵）が大量に町人のくらしの中に広がり、庶民の文化が発達したことをわからせる。  
教材について

浮世絵は、その制作技法上から肉筆画と版画に大きく大別される。版画の浮世絵が単色摺りから多色摺り（これを「錦絵」と称し、一般的に浮世絵といえばこの錦絵を意味することが多い）へと大きく変化したのが明和二年（二七六五）のことで、「大小」の摺り物という一枚のカレンダーの競争から始まった。

錦絵の制作は、まず版元（資本家であり、制作者兼編集者で、発売元でもある）の下に絵師、彫り師、摺り師の共同作業があつて大量生産が可能になった。完成した錦絵は絵草紙屋で販売されることになる。多色摺りにも耐えられる丈夫な和紙として越前奉書紙が使われた。浮世絵は今でいえば日常生活の消耗品として大量生産されたので、単価も安く見終われば紙屑となつて捨てられたので残っているものは少ない。教材としては、団扇絵（団扇にはるための版画で初めは丸形であつたが、しだいに横に広くなる）・東扇（切り抜いて扇の骨にはつた）・柱絵（縦六十八〜七十四cm、横十二〜十三cm、簡単な軸装にして庶民の節だらけの柱を隠すためにかけた）も使い、庶民の手軽な娯楽であつたことにつないだ。

## 授業展開

①九枚の浮世絵を何種類かに分けてみよう。

ここで扱った浮世絵は、次の九枚である。

○相撲絵：①「力士雷電」〈資料④〉・②「小柳逐手風の取組」

(歌川国貞)

○美人画：③「鍵屋のお仙」(鈴木春信)・④「高島おひさ」(喜

多川歌麿)

○風景画：⑤「名所江戸百景 両国花火」(歌川広重)・⑥「諸国

名所百景 周防岩国錦帯橋」(二代歌川広重)・⑦「百人一首乳母かえとき

猿丸太夫」(葛飾北斎)〈資料⑤〉

○役者絵：⑧「揚巻の助六 八代目市川団十郎」(三代豊国)・⑨「三代目佐野川市松

の祇園町の白人おなよ」(写楽)

中野君・小嶋君「顔④⑧⑨」「景色⑤⑥⑦」「全体、動きがわかるもの②③①」

杉本君(この顔こわいなと言いなながら⑨を動かす。久保くんから、おかまやという声。)

「女④⑨③」「風景⑤⑥⑦」「男①②⑧」

久保君「すぐ風景とわかるやつ⑤⑥⑦」「残りは風景とわからないやつ」

どうやら⑤⑥⑦は風景画として落ち着いた。そこで残りの六枚を男が描かれている

資料④



資料⑤



か女かで分けてみた。ここで松下君が、前々から声があがっていた⑨について、「歌舞伎の時、女の人の役を男がする」という意見が出た。そこで教師から、この絵は女形佐野川市松をあまりにもリアルに描き、いかつい顔が当時のファンの夢を碎き評判が悪い絵であったことを説明した。同じく歌舞伎に関係した絵として、⑧も子どもから付け加えられた。⑧は、八代目市川団十郎で、人気絶頂の三十二歳の独身であったが、興行先の大坂で自刃し多くの女性ファンを嘆かせたことを付け足した。

最後に残ったのが①②③④となった。どんな仕事をする人かで分けようと呼びかけた。子どもから出た声は、②はすもう、③は茶店のおばさん、④はモデル、①はそろばんもってお金をとる悪いやつ、両替商、「越後屋」、借金取りなどである。そこで彼のプロフィールを紹介する。身長百九十七cm、体重が百六十九kg。ここで子どもたちは相撲とりであることをつかむ。当時最強の力士雷電で、二十一年間土俵を踏んで以来二百五十四勝十敗、勝率九割四分九厘。長野県の農家の生まれながら、松江藩のお抱え力士となり、石高持ちとして帯刀を許され、参勤交代の行列にも参加したことを話す。子どもから「よく見ると刀、持ってるで」と指摘。①②は相撲の絵であることに落ち着く。

最後に残った③④は、子どもから看板娘という声が出たように、美人画と呼ばれる絵である。

そして風景画の説明をしておく。⑤は、隅田川にかかるのは两国橋で、この絵は川開きの様子を表している。学校のプール開きのように六月下旬に行われた。川面は船で埋めつくされ、橋上も群衆の「玉ヤ〜」「鍵ヤ〜」の掛け声と歓声飛び交った。⑥の橋は夏休みに行ったことがある澤辺さんが岩国の錦帯橋であることを教えてくれた。⑦はさすがに見当がつかない。この絵は、乳母が子どもに絵を描いて説明するように百人一首の意味を絵で説明しようというシリーズの一つ。本図の歌は「奥山に紅葉ふみわけ鳴く鹿の声聞く時そ秋はかなしき」。「おー」と子どもたちの声。

② 浮世絵を売っていた店を見てみよう。

どこにこんな絵が売られていたのだろうかという問いに対して、「浮世絵屋」「お店」「本屋さん」「問屋さん」「橋の上」と即座に答えが出た。ではだれが買いに来たのと尋ねると、「主に町人」「ひまな人」「ちよっとだけ武士」、中には「今で言えば、タレントのポスターみたいなものとちゅうの」と杉本君の声も混じる。

そこで「絵草紙屋」の浮世絵を取り出した〈資料⑥〉。「武士の絵」「女の人の絵」「本もならんだる」「買いにきてはるのは女の人や」などの声が出る。くわしくみていくと、「買いにきてどれにするか選んでいる人」「背中の子どもがつつみたいにした絵を持っている」も見えてくる。店の奥に並んでいるのは、子どもが分類した中の役者絵が多いようだ。

③ 浮世絵はどのように使ったのだろうか。

「店の前に掛ける」「看板」「かざりもの」「酒屋さんの前に『見返り美人』の絵、はったつた」「家宝にする」「風の絵にする」などと続いたが、今どう使われているのかと当時どう使われていたのかの混乱があるようだ。そこで教師から、次の3枚の浮世絵を示した。一つ目は団扇絵〈資料⑦〉と呼ばれているもので、消耗品として使い捨てられ、残っているのは貼られずに凶柄の見本として綴られたもの。子どもからも「うちわや」と声が出た。もう一つは東扇〈資料⑧〉とよばれるもので、最後は柱絵〈資料⑨〉であった。東扇の使い道は「せんに貼る」などとすぐだが、柱絵はむずかしそうだった。見てすぐ出たのは「しおり」と「定規」だった。野尻君からは、掛け軸とか風鈴の下につるすやつと出た。だんだん近づいてきた。そこでサイズを説明する。縦が長いのに子どもたちはびっ

資料⑥



資料⑨



資料⑦



資料⑧



くりする。杉本君「柱にはる」、小嶋君「帯」、野尻君「障子にはる」、松下君「大黒柱にはる」などという意見が出た。

最後に浮世絵一枚の値段はかけそば一杯くらいの値段で庶民でも手軽に買えたことをつけたし、今で言えばプロマイドやポスターのようなものであったことを子どもたちから出して授業を終えた。

### 子どもの感想

ぼくは今日の授業で思ったことは、浮世絵のいろいろな種類があったということです。あんなものをわけるとてもたいへんだと思いました。だから、その絵の一種類を書く専門の人がいたのだと思いました。今のポスターみたいなものの浮世絵をたくさん女の人が買いに来ていることを見ると今と全然かわらないなと思いました。

久保君

私は、浮世絵の絵に出てきた役者絵の人達は、げきをする人だと思いました。そして、すごい力士さんのことを町人や農民の中でえらい人かなと思いました。

この浮世絵を町人や武士は柱やうちわ、せんすにはってながめていたと思う。戦いの時代が終わって、平和な江戸になつたから町人や武士にも歌ぶきが知られたと思う。けれど町人や武士は、暮らしはあまりいい感じではなかったと思う。だからうちわやせんすや柱に絵をはって苦しい暮らしのことを忘れて気晴らしにしていたと思う。

中畑さん

#### 四 実践のまとめ

○結局この実践は全4時間の展開となった。江戸という都市を扱うことによって、その都市が將軍を頂点とする武士のために計画性をもってつくられたことがつかめたと思う。これは織豊政権のもとに進められた、検地・刀狩りといった政策の延長線上に城下町が位置付いていることにもつながる。また、そこに暮らす町人たちの生活、特に消費と文化にかかわって実践をすすめたが、江戸という都市を考えた際比較の見えやすい視点と思われるし、近世をとらえる時の新しい視点として実践的にも一つの可能性を示すのではと思った。さらに、商品の流通を考えると、近郊の農魚村の存在や各地の特産物の生産とごく自然に結びついてくる。この江戸のまちの実践の後農村を扱ったが、両者をつないで初めて近世の時代が鮮やかに浮かんでくるのではと改めて思う。

また、初めに述べたように江戸という都市の成立は近世初期のことであり、日本橋などのにぎわいも江戸図屏風の成立の時期から考えて初期に含めて妥当と思うが、浮世絵は江戸時代後期に位置付く。江戸のまちといっても、このように初期の姿と後期の姿の要素が一つの題材に入り交じっていることになる。小学生としては、一つの時代の中の違いよりも、一つの都市が持ついくつかの面として教えたがどうか。今後の課題としたい。

○授業方法としては、絵画教材を多様に使った。全体としては数をしばって、さらにくわしく見ていくという方法もとれると思う。絵画教材はそのころの人々の原寸大の生の暮らしが反映されている。江戸図屏風に描かれている多数の人々に注目すると町人の生き生きとした暮らし（特に消費生活）が見えてくるし、その町人が好んだ浮世絵に注目すれば暮らしの

中の楽しみといったものが見えてくる。それは、今を生きる子どもたちの視点とも重なりやすいのではと実感した。その  
実感を絵画教材はよりたやすくしているのではと思う。

〈参考文献〉

- 『歴史への招待 十七』「無敵雷電為右衛門」「八代目団十郎難波に死す」(NHK出版) 一九九五年
- 稲垣進「図説 浮世絵入門」(河出書房新社) 一九九〇年
- 小澤弘・丸山伸彦「図説 江戸図屏風をよむ」(河出書房新社) 一九九三年
- 「図説 日本文化の歴史8 江戸(上)」(小学館) 一九九八年
- 牧野昇・会田雄次・大石慎三郎「大江戸万華鏡」(農文協) 一九九一年

(奈良教育大学付属小学校)